

『竜王様と蜜花花嫁』

著：若月京子

ill：明神 翼

「ご馳走様でした。美味しかった〜」

「気に入ったようでよかった。財宝よりも食べ物の方が、リアムを説得するのに効きそうだ」

「このご飯は、誘惑が激しいです。あっ、でも、宝物庫、見せてくださいね。竜族の宝物がどんなのか見てみたい」

「キラキラすごいでしょ」

「へー」

「それじゃ、腹ごなしに見に行くか」

「はいっ！」

ついでに城の中も案内してもらいつつ、大きな錠がついている宝物庫へとやってくる。

美しく立派な扉を開けると、中はまさしく宝の山だった。

「う、うわー…キラキラ。金の王冠に、金の甲冑。金の剣…ついでに宝石も大きいですねー。おおっ、こんな大きなルビーってあるんだ……」

目に飛び込んできた黄金の量に圧倒されたが、一つずつ個別に見ると、どれも装飾が施された豪華で美しいものばかりである。

特に宝石は、その大きさといい色といい、うっとりで見入ってしまう。

「ダイヤ、サファイア、エメラルド…綺麗だなあ」

町の装飾品店にあるのは小さな宝石ばかりで、こんな大きなのを見るのは初めてである。そもそも子供っぽいうえに男のリアムは、宝飾品店に入ることもできなかった。

だからこんなふうの間近で見られるのは貴重な体験である。

「リアムは宝石が好きなのか？」

「だって、綺麗じゃないですか」

「リアムにやるから、好きなものを選ぶといい」

「えっ!? いや、いりません! こんなもの持ってたら、盗られないようにしなきゃってビクビクしっぱなしになっちゃいます」

「誰が竜王の花嫁から盗むんだ？」

「あー…うー…花嫁……うー……」

それは決定なのかと、怖くて聞くことができない。聞いたら、決定だと言われるのが分かっていた。

アリストアーはリアムに優しいし、気遣ってもくれるが、傅かれることに慣れた竜王なのである。自分の意思が絶対だし、リアムがいくら無理だと言っても聞き入れる気はない。

「なかなか花嫁という立場に慣れないのは当然だ。婚儀まで一月あるから、少しずつ慣れていけばいい」

「うーん、うーん、花嫁……」

唸るリアムの胸元に明るく輝くエメラルドの首飾りを当てられたかと思うと、アリスターは満足そうに頷く。

「リアムには、エメラルドが似合う。どれ、つけてやろう」

背後に回ったアリスターがリアムに首飾りをつけると、リアムはその重量にうっと呻く。

「お、重い……」

巨大なエメラルドにふさわしい大ぶりで豪華な金の首飾りは、重量も相当なものがある。下から誰かに引っ張られているような重さを感じ、よろめいてしまった。

「無理、かも。アリスター様、外してください。重い〜っ」

「これが重いのか？」

「すごく重いです。何キロあるの、これ。うーっ」

竜王のために作られただろ首飾りは、普通の人間には重すぎる。立派な体格だけでなく、頑健さや膂力においても人間と竜族では大きな差があった。

アリスターは呆れたような顔でリアムから首飾りを外すと、それを目の前に翳して首を傾げる。

「重いか？」

「はー…めちゃくちゃ重かったです。金があんなに重って、知りませんでした」

何しろ旅芸人に金貨は縁がない。銀と銅しか持ったことがないから、金の重さなど知るはずがなかった。

「アリスター様は、本当に重く感じないんですか？ つけてみてください」

「いいぞ」

そう言うとさっさと首飾りをつけるアリスターに、リアムは首を傾げて聞く。

「重くないですか？」

「いいや、まったく」

「すごいなー。あれが重くないんだ。あっ…ということは、もしかして王冠もすごく重いんですか？」

「リアムには重いかもな。試してみるといい」

アリスターは笑って宝物庫の中心に据えられている王冠をヒョイと取り、リアムに被せようとする。

「ま、待って、待って！ これ、王冠ですよ？ よく分からないけど、竜王様以外が被るのはまずい気がします」

「ただの物にすぎない。気にするな」

「そ、そうかなあ」

まあ、ここにいるのは自分とアリスターだけだから…なんて考えている間に頭に王冠が乗せられ、アリスターがソッと手を離れた途端、ズシリとした重さに悲鳴をあげる。

「お、重い、重い、重いっ。取ってー。アリストア様、これ、取ってくださいっ」

自分で取ろうにも、重くて持ち上がらない。あまりの重さに膝が崩れ落ちそうになるし、首の骨が折れるかもしれないという恐怖にも襲われた。

「やっぱり重かったか」

アリストアが笑いながら王冠を取ってくれて、リアムはハーツと大きく息を吐き出す。

「重かった…すごく重かった……。アリストア様、生誕祭のとき、これを被ってバルコニーに出てきますよね？ 本当に重くないんですか？」

「ああ」

「すごいなー。オレ、首の骨が折れるかと思いました。あっ…せっかくだから、王冠を被ってください。遠くからしか見たことがなくて、もっと近くで見たいなーってずっと思ってたんですよ」

「いいぞ」

ヒョイと無造作に頭に乘せると、王冠と首飾りとで立派な竜王のできあがりだ。

「うわー…やっぱり格好いい。そんなすごい王冠と首飾りに負けないなんて、すごいなあ」

「格好いいのか？」

「めっちゃくちゃ格好いいです。アリストア様、存在感のある超絶美形だから、いかにも竜王様って感じですね」

あまりにも自分と違いすぎて、うらやましいという感情も生まれえない。美しいものは目に楽しいなあ、アリストアのまわりをグルグル回って竜王としての姿を堪能した。

「お目通りで、竜王様を近くで見られるかもって楽しみにしてたんですよ。痣のおかげで美味しいものを食べられて、お城見学もできるかもしれなくて…ラッキーなんて思ってたんですけど……」

「花嫁になれて、城を見学だけではなくて住むことにもなって、毎日ご馳走とオヤツだ。とてもラッキーだな」

「ううっ…過分なラッキーはいらなかったのに……」

花嫁候補として普通では立ち入れない場所に入れて、見られないものを見られるだけでよかったのだ。花嫁に選ばれたいなんて、思ったこともない。

面倒なことになったなあと頭を抱え、思わずアリストアに文句を言ってしまう。

「アリストア様ってば、どうして昨日、あそこにいたんですか？ 会わなければ、オレなんて目に留まらなかったはずなのに」

「気分転換に飛んでいて、花嫁たちの庭が慌ただしいのに気がついた。そういえば花嫁候補たちが来る日だったかと通り過ぎようとして、なんとなくリアムが気になったんだ」

「えー、なんとなく？ 昨日、いろいろな色の竜を見ましたけど、黒はいなかったですよ。昨日は天気がよかったし、黒は目立つから気がつきそうなのに」

「ああ、私は姿を消せるから」

「は？ 姿を消せる？ どうやって？」

「ウロコの色を変化させて、背景に溶け込ませるんだ」

「何、それっ、すごい！ 見たい…見たいです、アリストター様！」

リアムが目をキラキラさせてねだると、アリストターは苦笑しながら言う。

「ここでは、まずい。廊下でならいいぞ」

「はいっ」

王冠と首飾りを元の位置に戻して廊下に出ると、アリストターは竜の姿を取った。

深く強い黒色のウロコはきらめきを放ち、地味な色のはずなのに美しいと感じる。

「おおーっ、黒竜、格好いい！ 強そうです」

「強いんだが……」

ボソリと呟いたかと思うと、アリストターが見えなくなっていく。

「お？ あ？ いなくなった……いや、いる。よく見ると、いる。えー、何これ、すごいっ」

透明になったように思えるが、実は違う。すべての色を持つという竜王が、背景と同じ色彩へと変化したのである。

リアムは興奮し、すごいすごいと言いながらアリストターにペタペタと触っているのを確認した。

「アリストター様、すごいです！」

「そうだな。なぜ見えなかったか、分かっただろう？」

「はい。こんな近くでもよく見ないと分からないんだから、空を飛んでたら気がつくはずありません。うーん、すごい」

リアムはもう、その言葉しか出ない。

そしてアリストターが人型に戻るのにガッカリしつつ、不思議に思ったことを聞く。

「竜族の本体は、竜のほうなんですよね？ 竜のときは何も着てなかったけど、今は着てる…服ってどうなってるんですか？」

「力を使って自分の中に取り込み、人型になるときに戻す。これはある程度成長してからでないとできないから、子供のうちはダブダブの服を着せることになる」

「ああ、竜の姿になるたびに服が破れてたら、もったいないですもんね」

「そういうことだ。特に赤ん坊の頃は、いつ竜になるか分からないからな」

「赤ちゃん竜って、どれくらいの大きさなんですか？ 卵、そんなに大きくないって聞きましたけど」

「そうだな…こんなものだ」

アリストターが指で示した大きさは、せいぜい五センチ。大人の竜は見上げるほどの巨体なのに、卵はそんなに小さいのかと驚いた。

「人型を取るのは、孵化して一カ月から三カ月というところだ。竜のほうが安全だからな」

「なるほどー。ちゃんと本能で分かっているんですね」

「ああ」

「手のひらサイズの赤ちゃん竜、見てみたいなあ～。可愛いだらうなあ」

「自分で産むといい。きっと、私に似た竜が生まれてくる」

「うっ…じ、自分で……ううっ…考えられない……」

花嫁候補の痣があり、自分が竜族の花嫁になれるのは知っているが、リアムはそんなつもりなどなく育ってきた。

竜王の花嫁なんていう大それたことはもちろん、竜族の花嫁になる気もなかった。ごく普通に、旅芸人の誰かと結婚するのではないかと思っていたのである。

それがよりによって竜王の花嫁となり、卵を産むというのは想像もしなかった。

「卵…うーん、卵……」

「小さなものだから、体への負担はないらしい。気がつかないうちに産まれていたなんていうこともあるようだぞ。起きたらベッドに卵が転がっていて、驚くとかな」

「ええ？ それ、潰しちゃったらどうするんですか？」

「問題ない。竜の卵は頑丈で、よほどのことがないかぎり割れたりしないからな」

「へー」

「だからリアムも安心して産むといい」

「いやいや、それはまた別の問題で……」

竜王の花嫁なんて自分には無理だと何度も訴えるが、アリストアーは聞き入れてくれない。

リアムは無理無理と言いながら階段を上り、最上階まで戻ろうとする。

しかし宝物庫は一階で、竜王と花嫁の居住空間は五階。アリストアーに合わせて一気に上るには、少々苦しいものがある。

四階にさしかかったあたりでペースが落ちたのを見て、アリストアーはリアムをヒョイと腕に抱え上げてしまう。

「リアムは体力がないな。小さいからか？」

「ううっ…否定できないかも。竜族の体格に合わせているからか、ここの階段、一段が普通より少し高い気がします。だから疲れちゃうんですよ」

「ああ、リアムの歩幅だと大変なのか」

「はい」

アリストアーにとっては普通の一步でも、リアムには無理をしての一步だ。疲れやすくて当然だった。

ここまで来ると他に人もいないことだし、アリストアーに運ばれるまま楽をさせてもらった。

ローランドが扉を開けてくれて居間に入ると、そこには大量の布が運び込まれており、たくさんの色彩で溢れ返っていた。

「うわっ、すごい量の布」

アリストアーに下ろしてもらったリアムは、驚きながら布の山に近づいた。

「リアムが欲しがったものだろう？好きなものを選ぶといい。遠い地から取り寄せさせているものは、もう少し時間がかかる。一座には帰せないが、それ以外の望みは叶えるぞ」

「えー…本当に帰っちゃダメなんですか？」

「ダメだ。リアムは花嫁として私の側にいろ」

「うーん…別に、花嫁としてじゃなくてもよくないですか？普通に友達として、お城を行き来するとか。竜に乗せてもらえば、どこにいたってすぐに来られるし」

「……………」

その言葉にアリスターは考える様子を見せる。

「旅一座に戻る？」

「はい。だってオレが生まれ育った場所だし、両親や仲間がいるから」

「……………」

もしかして説得できるかな…と淡い期待を抱いていたが、首を横に振られてしまった。

「ダメだ。私から離れることは許さない」

「えーっ」

「それに、どうも私は、リアムに私の卵を産ませたいらしい」

「えええええーっ!？」

驚愕の声を上げるリアムを抱き寄せ、アリスターは頬や首筋、肩を手のひらでなぞる。それからふっくらとしてやわらかい唇にプニプニと触れ、唇を重ねてきた。

「——!？」

目が回るようなキス。リアムは驚き、バタバタと手を振ったが、すぐにアリスターに押さえ込まれて濃厚なキスに呑み込まれていった。

「んう…ふ……あん……」

侵入してきたアリスターの舌が、リアムの口腔内を好き勝手に動き回る。

内側を舐め回され、舌に吸いつかれて、リアムは目を回してしまふ。

ようやく唇が離れたときにはもうへ口へ口で、自分で立つのも難しい状態だった。

アリスターがしっかりと抱え込んでくれなければ、座り込んでしまったに違いない。

しかしだからといってアリスターに感謝などするはずもなく、リアムはハッと我に返ると涙目で文句を言う。

「オレのファーストキス！ ひどい、ひどいっ。返せ！ 戻せ!!」

「ファーストキスだったのか」

アリスターは驚いたような顔を見せたかと思うと、嬉しそうに笑う。

それから、怖いような凄みのある笑みを浮かべた。

「私が初めてでよかった。余計な殺しを命じなくてすむ。リアムの初めてはすべて私がもらおうし、私以外、リアムの唇や体を知る者は存在させない」

「え……」

なんだかすごく怖いことを言われていると、リアムは怯える。ものすごく大ごとになりそうな予感に震えた。

「旅一座には、金と色がつきものだ。そんなところにリアムを戻すつもりはない。両親や仲間に出たいと言うのなら…そうだな、町に一座のための劇場を造らせよう。そこで芸を披露すればいい。出たいときは、私が同伴の場合のみ許可をする」

「ええーっ」

「もちろん一座のための住居や生活費も負担するから、心配しなくていい」

「えええーっ。ま、待って！ 待ってください。いろいろなことがありすぎて、頭がついていき

ません。少し考える時間、ください」

「それは構わないが、私の意思が覆ることはないぞ。早速、劇場造りに取りかかせよう」

「うわー……」

竜王の権力が絶大なのは知っているが、ポンと劇場を造るほどとは思わなかった。

一座は竜王のお抱えということになるのだろうが、それが自分のためだと思うと動揺してしまう。

「劇場って…贈り物にしては、大きすぎる……」

「花嫁のためなら、大したことではないぞ」

「ううー……」

ただの人間と竜王とではスケールが違うと、リアムは頭を抱えた。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>